

大石寺に伝わる御影と、他の日蓮宗系に伝わる祖師像との違いについて
大石寺における、日蓮御影と日興御影の比較

日蓮御影	日興御影
<p>①若々しい作り（妙法の不老を表現する為）</p> <p>○実際、日蓮大聖人は61歳の生涯、日興上人は88歳の生涯ですので、日蓮大聖人は、病気衰弱の衰えはあったとしても、老齢化による、老人相では無かったはずであります。</p> <p>○私の信仰心と技量が稚拙な為、青年の様な相に彫刻する事が出来ませんでした。</p>	<p>①老人風の作り（妙法の不死を表現する為）</p> <p>○日蓮、日興の一对の姿で、妙法と森羅万象の生命の不老不死、永遠常住を表現する。</p> <p>○老人風と相容れない為か、日蓮御影の様に肥満体ではないが金剛襟、福耳は同様同型である。</p> <p>○私の信仰心と技量が稚拙な為、老いの衰え、やつれを彫刻すると、ただの、みすばらしい姿になってしまいます。謗法厳戒の信念を貫いて来た、古木の様な品格が滲み想起させる様な彫刻をする事が出来ませんでしたので、日蓮大聖人を四角顔、日興上人を面長な相に彫刻し、違いを表現する事しか出来ませんでした。</p>
<p>○殆ど全てが、日蓮大聖人を偉大に見せる為、肥満体、金剛襟、福耳に造形されているが、衣食に事欠く劣悪な生活で、肥満、金剛襟、顔の半分以上の長さの福耳は、有り得ないし、凡夫僧を主張しながら、尊敬の念が過ぎた姿になってしまっていると思われる。写実的と言われる池上本門寺の祖師像さえも、ふくよかな肥満体となっている。これは仏像、偉人像等々、全般に渡って、仏師の伝統的技法として意識的、無意識的に変形（デフォルメ）誇張し、それぞれの仏像に定規のルールポイントを設け、そのルールポイントを押さえて彫刻するようにしているが、大石寺の凡夫僧日蓮大聖人、日興上人の御影に於いては、仏師が造り上げた現実から逸脱した定規を破り、脱却しなければいけ</p>	

ないと思います。

○御影着用の袈裟、衣も、日蓮大聖人、日興上人の時代である鎌倉時代に、中国から渡来した仏教各宗の中から、日蓮大聖人がどの宗派の袈裟、衣を踏襲し用いたか、原形とし改良したか、文献資料が皆無の為、皆目分からない、その為、存在する御影の袈裟、衣の形状は様々であります。これは、仏師各人が、過去の御影を模倣するか、各宗の袈裟、衣を参照にして、個人の時代考証と創造を加味して造形しているものと思います。

そこで、私は、現代の富士門流に於ける袈裟、衣は、日蓮大聖人、日興上人からの長い歴史を淘汰して行き着いている形状ですから、日蓮大聖人、日興上人の着用されていた袈裟、衣と違っていたとしても、後世の各仏師のあてずっぽうの推量でバラバラな形状になっている弊害を生じているよりも、現代の袈裟、衣の形状に彫刻する方が、あたらずと雖も遠からずの姿であると考え、その様にしました。

○金剛襟で、着流しという上下の取り合わせバランスも常識から外れる姿であります。

○鎌倉時代の正座、胡坐と、現代の正座の違いに、法門的意味は皆無である事と、胡坐の姿の裾のデフォルメ（変形）が、現実を無視した、かけ離れ過ぎた虚構の形状になってしまっているという事であります。

○デフォルメと言えば、大石寺系には有りませんが、身延日蓮系の祖師像の少数には、頭の剃髪跡、髭の剃り跡までリアルに青く着色しているものがありますが、そこまで写実的にする意味必要は無いと思います。

○大石寺系は、「御影（みえい）」と称し、身延日蓮宗系は「祖師像」と称す。大石寺系は、日蓮大聖人が法華経の行者として、法華経を身読され、末法一切衆生に法華経を伝えてくれた末法の本佛である。との教義を立てます。日蓮大聖人が「常住此説法」生きておわします様に、その面影を慕い偲び、今現在の存在として師弟一箇し信行に 励む事が成仏への道であるという観点から、「御影」と言います。身延日蓮系は、日蓮宗の祖師だから「祖師像」と呼ぶだけであります。

②法華経経巻第六の経巻、壽量品を開き見る。自らの勉強している様な、弟子信徒へ読み、講義していると感じられる様な姿。

○末法の凡夫僧として、常に法華経の行者として精進して行こうという姿。法華経の

②【撰時抄】（和本）を、胡坐の上に載せた様に持ち、自らの勉強している様な、弟子信徒へ読み、講義している様な姿。

○末法の凡夫僧として、常に法華経の行者として精進して行こうという姿。法華経の

行者として生きる姿こそが仏であるという姿。つまり、自身は完成であり、弟子信徒は未完成であるというのではなく、上下の差別区別無く、一切衆生が平等である事を表している。

○身延日蓮系の祖師像の中で、代表的とされる、日蓮大聖人第七回忌、正応元年（1288）日持上人、日浄上人が願主となり造立された、広く【生身の祖師像】と称せられる、写実的な池上本門寺の祖師像は、右手に母梅菊の髪の手で作ったとされる払子を持ち、左手に内典の孝経と称せられる法華経第六の巻物を握る。その為、別名、【孝道示現の御尊像】と呼ばれている。この祖師像を模倣して造られる祖師像は、同様に、払子を持ち、法華経を開かないで巻物の状態で持つ。

○右手に【笏】左手に、法華経を開かないで巻物の状態で持つ。経巻は横向きが一般に多いが立て持ちの祖師像もある。

○【払子】とは、白熊や牛馬の尾毛を束ねて柄を付けた仏具。僧が塵を払い、蠅等を追うために持つ物。（同）払塵ふつじん

《新字源》748p

○【払子】は禅宗僧が特別な法要時だけでなく、日常の所作に用いている為、禅宗のイメージが強い。

○【笏】平板。五位以上の官位ある者が礼装した時に、帯の間に、挟み持ち、備忘のために君命などを書き留めた物。（参考）

行者として生きる姿こそが仏であるという姿。つまり、自身は完成であり、弟子信徒は未完成であるというのではなく、差別区別無く、一切衆生が平等である事を表している。

○【撰時抄】は、建治元年（1275）聖寿54歳身延から西山の由井氏に与えられた書で、題号の【撰時抄】は、【時を選ぶ抄】の意味で、五濁悪世の末法に広宣流布せしめる一切衆生平等成仏の法は南無妙法蓮華経の法しかないことを示された、十大部の一つであります。釈尊は在世、正法、像法時代担当の仏であり、日蓮は末法の担当であり、本仏である事を示す。日興上人が【撰時抄】を拝する事は、末法萬年に、末法の本佛日蓮大聖人の法を弘通する事こそ、一切衆生平等成仏の肝要である事を示されている。

○和本という事は、真筆から日興上人が写本、製本し、扱いやすく作った本という事が必然的に分かる。

○本を持つ手は、左手は手の平を上向きにし、右手は腕首を縦にし、中指の二本だけ、柔らかく握った拳から、ピースのポーズの様にし、本の隅を載せ、次の頁をめくる様な姿。常識的な本を持つ手の姿形は、左右とも左手の姿形で、手の平と親指で挟み押さえつけていなければ、本を落ち着かさず、本を持つ事は出来ないので、右手の姿形では、現実不可能であり不自然であり

日本では、骨と同音を避けて、【笏】の長さが一尺の所から、尺の音を借りて「しゃく」といった。

勿論、大石寺と同型の、【法華経第六】を左右に開き見ている姿の祖師像も、あります。

【弘子】【笏】も、日蓮と弟子、信徒とは違う立場だよという差別区別された権威の象徴として持たせている。いつ、だれが、どうして持たせるようにしたのか分かりませんが、日蓮大聖人が持っていたという歴史的裏付けはありません。【笏】に至っては、朝廷の官位の象徴としての持ち物ですから、日蓮大聖人が所持するはずがないものであります。身延日蓮系は、釈尊を本仏として、日蓮を大菩薩として、あくまでも日蓮は南無妙法蓮華経を末法に伝える釈尊のメッセンジャーであって、日蓮は末法の本佛であると主張する大石寺を、最眞の引き倒しであると批判しますが、祖師像の姿を見る限り、権威を最大限に誇示し、【弘子】【笏】【金襴緞子の袈裟衣】【紫の衣、緋色の袈裟に井桁の金紋】と完全無欠に上げ奉って、最眞の引き倒しの勘違いをされているのではないかと思えるのであります。上げ奉れば、上げ奉る程、日蓮大聖人のあるがままの姿とかけ離れ矛盾し、逆に日蓮大聖人を貶める事になってしまっています。改めるべきだと考えます。

ます。その為、法門の意味を包含しているのではないかと推測しますが、未だ確かな伝聞を得る事が出来ていません。

○ひょっとしたら、法門の問題では無く、右手の形状は、暑期の間、団扇と和本を同時に無理矢理持たせ、有り得ない形状になる為、苦肉の策として、人差し指と中指を立てているという理由だけなのかもしれません。

③ 白、縹り房の念珠を左手首に二重巻にして掛ける。

○大石寺僧俗の用いる数珠は、白のみ。階級や、自分の好みで、赤、紫、茶等々の色房は厳戒。

○大石寺では、袈裟、衣、数珠を【三衣】と拝する。

③ 白、縹り房の念珠を左手首に二重巻にして掛ける。

○身延日蓮系の祖師像は、どういう理由があるのか、立ち姿の銅像等は、必ず数珠を持ったり、振り上げていますが、祖師像では、数珠を所持していないものが大半であります。理由は分かりませんが、数珠を掛けていないというのは、僧として基本的に欠落していると思います。

④ 無地の薄墨（灰色）の衣、白五条の袈裟。

④ 無地の薄墨（灰色）の衣、白五条の袈裟。

○大石寺末代の弟子に当たる現代の僧侶達の袈裟衣は、色は薄墨の衣、白五条を遵守していますが、僧の階級によって絵柄綾織の法衣を着ている。日蓮、日興の御影は、絵柄綾織は無く但薄墨の衣、白五条の袈裟が遵守されている。つまり、師弟が食い違う矛盾を露呈している。下衣に当たる、袴も、藤之丸紋の指貫を指定し、下位の権訓導から大講師迄は、薄水色（浅黄）切指貫。権大僧都から大僧都迄は、薄茶色切指貫。権僧正から大僧正迄は銀鼠色本指貫。と、法を表す法衣が、階級表現に使われる。藤之丸紋指貫は神官も正装で、元々は宮中に上がる「参内」「参朝」の正式衣装と定められているのであります。ですから、大石寺は朝廷に仕える神官と同じ物を着用しているということになります。権威の象徴である朝廷に心が擦り寄り、自分の格式を上げたい。朝廷から御呼びがかかれば、いつでも「参内」する姿を調べていますよ、という名聞名利の表れだと思えます。法門の上から浅黄色、薄茶色、銀鼠色が法門の上で何を表現しているのか説明出来る人は誰もいません。ただの世法の名聞名利でしかない、僧侶の正装にすべきものではないからであります。まして、日蓮大聖人、日興上人の御影様は、色指貫

を着用していません。これも師弟が食い違う弟子の愚かさと矛盾を御影様が証明しています。長年に渡りこれを何故恥と感じないのか、何故改めようとしないのか、かくも、人間の名聞名利、立身出世の煩惱は深いのかと慨嘆するのみであります。

○袴は一般世間に共通の礼服であります。袴は、下半身の衣と称されるものであります。上半身の衣が但薄墨ならば、当然下半身も但薄墨の衣の生地で作られた袴でなければいけないのであります。

○身延日蓮系の祖師像は、金襴緞子の袈裟衣、が主流で、少数、大石寺と同じ薄墨の衣、白五條の袈裟があります。身延日蓮系僧侶も金襴緞子の袈裟衣、紫色の衣、緋色の袈裟に祖師家紋と称する井桁配置した袈裟を着用していますので、祖師像と一致して何の矛盾もありません。ただしかし、祖師が苦難の生活の中で金襴緞子の袈裟衣を着用していた事実は、有り得ないでしょう。大石寺の貫主、能化も袈裟に縫家紋を入れて喜んでいますが、出家し、家を後にし、一切衆生平等成仏に思いを致さなければならない僧が、家名を上げる立身出世主義に陥っている愚かさを冷静に省みなければいけないのではないかと思います。日蓮大聖人が家紋を袈裟に掲げるはずがありません。

⑤腹籠り（胎内仏）の十界互具の本尊。

○首を胴に差し込む様に作り、首の下、垂直に筒状の穴を彫り、十界互具本尊を納める。

○大石寺の御影は、森羅万象一切衆生に、南無妙法蓮華經の仏性が具わっているという法を示す為に、御影の、【腹籠りの本尊】と言います。

《此中已有如来全身》《妙法經力即身成仏》菩薩が法を悟って仏と成る。諸法の実相である南無妙法蓮華經を生命の真髓に納めるとの法門を、日興上人が日蓮大聖人の御影様を造立された時に、この様に定め、日目上人が遵守され、大石寺の伝統に定まったと推察される。

⑤腹籠り（胎内仏）の十界互具の本尊。

○首を胴に差し込む様に作り、首の下、垂直に筒状の穴を彫り、十界互具本尊を納める。

○身延日蓮宗系の祖師像胎内仏は、

☆金沢山 妙應寺祖師像胎内仏、日蓮の小さな木像。

☆鎌倉市扇が谷 薬王寺祖師像胎内仏、背面腰部に穴があり、そこから胎内に將軍家斉の御骨を納めたと伝わる。

☆池上本門寺祖師像胎内仏、像の底につまみ蓋付きの筒形銅器が埋め込まれ、これに日蓮の遺灰が納められている。

☆伊豆 本道寺祖師像胎内仏、頭部に舍利瓶と見られる7cmほどの破損した小さな濃い青色のピール瓶状のガラス瓶と木製の蓋、瓶に納められていたと思われる故指先程の白い骨片、舍利、古文書には「日蓮大聖人御骨一粒」とある。

☆金沢市 本興寺祖師像胎内仏、胎内に17cmの丸形厨子を納め、その中に13,1cmの彫金舍利塔を安置、内部を三段に区切り、中段に納められた文書に、上段に仏舍利、中段に日蓮の遺骨、下段に日蓮の直弟子日郎と孫弟子日像の遺骨（瑪瑙質小石）を納めたと記される。

5点、特徴的な祖師像胎内仏を列挙しました。祖師像に祖師の御骨で、祖師そのものを表現する考え方が分かります。又、本興寺の様に祖師像に仏舍利を納めるというのは、釈尊を本仏とし、上行菩薩再誕日蓮を釈尊のメッセンジャーとして日蓮大菩薩と考え、日蓮の本質は釈尊だという身延日蓮宗系の法門は分かりますが、祖師像に日蓮の御骨。という図式よりも、混乱して分かりにくい図式だと考えます。釈尊は在世、正法時代、像法時代の担当であり、末法の担当は日蓮大聖人であります。釈尊は釈尊、日蓮は日蓮ではないのでしょうか。薬王寺の將軍家斉が、どれ程、天下人で薬王寺の建立主であっても、祖師像を骨壺にしては、権力者に阿った権威主義で、法門的にどうにも整合性がありません。

いずれにしても、身延日蓮宗系の祖師像胎内仏には統一性が有りません。これは法門として、日蓮大聖人の存在が定まっていないという事になります。大石寺の様な、十界互具本尊の腹籠り（胎内仏）の本尊は、見出す事が出来ません。この点に於いても、完璧に日蓮大聖人を、信仰上どのように拝するのか、法門解釈の違いが明確に分かります。

⑥鎌倉時代の正座である胡坐

⑥鎌倉時代の正座である胡坐。

○鎌倉時代の正座は胡坐という事で、これは仏像の守らなければいけない基本規範ですが、金剛襟で着流しという上下の意義の整え方のバランスがちぐはぐで違和感があります。そして現実には胡坐をかくと、着流しでは着物の合わせの寸法では、前がはだけ、跨ぐらが見えてしまいます。それは困るので、全ての仏像は、この胡坐姿の前の、はだけを、衣を柔らかく重ねて、はだけを隠すデフォルメをしています。しかし、現実には衣で前のはだけを隠せば、左右対称広がる衣の裾は、有り得ない事になります。私は、太平の世となり、本格的に茶の湯の文化が広く浸透し、現代の正座が世の中の正式な正座になった、その正座姿で彫刻しました。そして袴は、下の衣として、足元の乱れを補正する着物ですから、上下同等の威儀を考えた時、袴を着用した正座姿が相応しいと考えました。鎌倉時代の胡坐正座に法門的意味は、何もありませんので、何の問題も無いと考え、その様にしました。「現代の正座は昔罪人に刑罰としてかしこませるものだから、御影様に、その姿をさせるのはおかしい。」との批判もありましたが、私達は普段に正座を特別な苦痛の刑罰拷問の様に考えてしている人はいないと思います。むしろ、心の襟を正す様な真摯な気持ちを抱きますので、その様な、日蓮大聖人、日興上人に御仕置きをしているのではないかとの、突飛な考えを持つ必要は無いと考えます。

⑦綿帽子

○大石寺の御影様の綿帽子上げは10月1日。
綿帽子下げは4月1日であります。10月1日は、世間一般の春夏の衣替えの日で、寒さの兆しに入る目安です。4月1日は、衣替えの日ではありませんが、春の始まりと捉えられる月の始まりであります。特別な意味をなす日ではありません。

⑦ 綿帽子無し

○綿帽子は、文永元年（1264）11月11日の夕刻、工藤吉隆邸へ向かう途中、安房東条の郷松原大路（現在の鴨川市広場付近）に日蓮大聖人一行が差し掛かった折、東条景信を首領とした念佛者の集団から襲撃を受け、日蓮大聖人は東条景信の刃で頭を切られ、左

手を骨折し、日蓮大聖人を守ろうと立ち回った弟子鏡忍房は斬殺され、急を聞いて駆け付けた工藤吉隆も斬殺されるという、地頭が権力を傘に、念仏は無間地獄に堕ちる権経であると訴えた日蓮大聖人を憎み、私怨を晴らそうと行った問答無用の蛮行であります。この時、頭に受けた刀傷が、生涯、特に寒くなると疼いたとの事から、この期間、綿帽子を、御上げするのであります。この意味からすると、綿帽子は、日蓮大聖人の受けた刀傷によるものでありますから、日興上人に御上げするのは、背景理由が無い事と考えます。

○身延日蓮宗系の綿帽子は、各寺院によって違います。

小松原法難11月11日上げ～立教開宗会4月28日下げ

小松原法難11月11日上げ～春季彼岸会中日下げ

小松原法難11月11日上げ～釈迦誕生花祭り4月8日下げ

秋季彼岸会中日上げ～春季彼岸会中日下げ

この様にバラバラであります。

○綿帽子を三色に染め、下が赤、中が紫、上が白で、赤は小松原法難で流した血の色、紫は、日蓮大聖人の衣の色（日蓮大聖人が紫の衣を着用していたはずがない）。白は雪の色（何故この季節で雪でしょうか？）と説明して、到底帽子でなく布団を頭へ載せている様な形状の物があります。尚且つ、この綿帽子を下げた後に、この綿を小さく分けて、御守り袋に入れて、御守りとして信徒に配布するという、風習もあります。小松原法難で疵を受けながらも九死に一生を得た事にあやかり、それを御守りにするという、凡夫のすぎる心根も分かりますが、法華経の行者として生き、剣難を受け、弟子、信徒が殉死しているわけですから、それは、まったく意味が違うのではないかと考えます。

○大石寺客殿安置、万治3年（1660）造立の日蓮大聖人御影頭部左には、小松原法難で受けた刀傷が彫刻されています。これは他の御影には無い稀有な表現と考えます。一般に肖像画、ブロンズ像を造る時には、痣、疵、シミ等々の欠点となるものは消して、良い所だけを強調デフォルメするものであります。以前、制作者のインタビューをテレビで見えていましたら、「10歳位若く、穏やか、やさしそうに造ると、本人も、そっくりだと喜ぶ。」と言っていました。日蓮大聖人の御影が、肥満体で福耳である事は、こういう心理によるものと思います。しかし、その事から考えると、逆に日蓮大聖人の御影に刀傷を彫刻する事は、常識的には考えられない事ではありますが、客殿安置の日蓮大聖人御影を造立する関係者は、日蓮大聖人の法華経の行者として生きた生涯を、この刀傷を彫

刻する事によって、信仰者の心に深く刻み、法華經の行者として生きる事こそが仏である事を伝えたかったのではないかと考えます。

⑧ 襟巻

大石寺の御影の襟巻上げは、9月12日。

下げは、6月1日です。

9月12日は龍ノ口法難の日であります。佐渡流罪から身延山での劣悪な環境での、長年の生活で、下痢の病（高温多湿、山中の高い木立に覆われ、日照不足、谷あいの長期に渡る低温生活による下痢の病《胃腸障害》）で、日蓮大聖人は長年苦しみます。この病が持病となり、入滅の主原因となります。この苦しみを生活を共にして見ていた、日興上人、日目上人が大石寺に御影を造立した時に、せめて寒さの時期には身体を冷やさない様にとの思いで襟巻をお掛けしたのだと考えます。つまり、日蓮大聖人を偉く見せようと夏でも巻いている様な襟巻では無い冬季限定の襟巻。それも龍ノ口法難の9月12日に上げるという事は、昔から僧俗が、龍ノ口法難会の法要を大切に奉修し、龍ノ口法難から佐渡流罪、身延入山へ思いを致し偲んだ事が、この日付で分かるのであります。故に、綿帽子同様、この襟巻も、日興上人には、そぐわないと考えます。

⑧ 襟巻無し

○身延日蓮宗系の祖師像は偉く見せる為の襟巻ですから、上げ下げも無く一年中巻いていると考えます。

⑨ 団扇

○ 団扇上げ6月 1 日～団扇下げ9月12日

9月12日は襟巻上げと同日で、龍ノ口法難の日に当たります。龍ノ口法難の意義と、6月1日は、世間一般の衣替えの日に当たります。季節の移り変わりを、参集の僧俗が身を持って感じる為に、この日を選んだのだと考えます。

⑨ 団扇

龍ノ口法難は、日蓮大聖人が末法の本佛を自覚された大切な日であり、六老僧の中でただ一人、その事を守られた日興上人にとっても、基軸になる大切な日であります。そして、夏の風物である団扇も、人間味溢れる、凡夫僧を表わす姿になりますので、綿帽子、襟巻は日蓮大聖人だけが、意味に叶っていると考えますが、団扇は、日蓮大聖人、日興上人、同様に所持すべきだと考えます。

○私が法道院へ在勤していた、大学在学時の1975～1978の時代に、明治時代から信仰を法燈相続して来ている法華講の御信者と信心に関する話をする機会が沢山ありました。その方が、夏の暑さの盛りの時期に、まだ御寺にもエアコンが無く、天上に付けられた扇風機が回っているだけで、御信者さんの家でも扇風機が殆んどの時代でした。その御信者さんが、「今の時代からすると笑われると思いますが、私が子供も頃は、こんな便利な勝手に回ってくれる扇風機なんか無かったから、団扇で扇ぐしかなかった、御爺さん御婆さん、御父さん御母さんが勤行をする時、自分を扇ぐんじゃなくて、御本尊様、大聖人様も暑いだろうと言って、御本尊様、御御影様を静かに扇ぎながら、勤行してました。」私は、その話を聞きながら、日蓮大聖人が生きている様に、家族の一員の様に、尊敬しながらも、親近感を抱いて信仰されていたんだなあっと、ほのぼのとした暖かい気持ちになりました。団扇は、自分達と同じ、暑い寒い、嬉しい、悲しい、苦しい、辛い、痛い、痒い、ひもじい、等々の人間、凡夫僧として、生きられた仏聖人。手の届かない完全無欠の雲上仏で無く、手の届く仏、十界互具の仏として、手本として信仰して行くのが、本来の大石寺の信仰であると感じました。

○身延日蓮宗系の祖師像には、団扇を所持しているものはありません。祖師を権威の象徴として上げ奉って、【払子】【笏】を持たせ、その上で、暑い時期【団扇】を持たせたら、矛盾した滑稽な姿になってしまうからだと思います。この【団扇】は、ほほえま

しい夏の風物としての、ただの【団扇】でなく、大石寺と身延日蓮宗系の信仰観の大きな違いを表現している小道具だと考えます。

○大石寺系の日蓮大聖人の御影は、経巻を握った右手に、無理矢理、経巻と団扇を持たせています。日興上人の御影も、撰時抄の和本を持っている、人差し指と中指の二本を立てた右手に本と団扇を無理矢理持たせています。この形状姿勢はどう考えても、経巻を読みながら団扇で扇ぐ、本を掴み押さえ読みながら団扇で扇ぐ等という事は不可能な事ですので、私は右手が届く畳の上に、団扇置きを作り、団扇を立てて置き、日蓮大聖人、日興上人が、気が向いた時いつでも使って頂ける様に配置いたしました。

⑩安置の配置

○大石寺御影堂は、「一体三宝式」と称し、仏宝としての法即人の本尊、僧宝としての唯我与我血脈付法の日興上人が加わる。という訳の分からない煙に巻いた様な事を大石寺では言っています。

日蓮大聖人の御影一体の場合は、必ず、本堂本尊の前に安置します。つまり、十界互具本尊の首題である。南無妙法蓮華経 日蓮の、法人一箇の相貌を立体化し、強く末法の本仏日蓮大聖人の生き方が、成仏道の手本である事を、信仰者に意識させる為に、「法人一箇」の安置をするのであります。加えて、御影堂は、日蓮大聖人の在世を表わし、常住此説法を表わすのが御堂であります。

⑩安置の配置

○中央、本尊。向かって左、日蓮大聖人。向かって右、日興上人の安置は客殿式と言います。大石寺では、これを「別体三宝式」と称しています。久遠元初・本因妙・一念三千の法を一切衆生に伝える為に顕した本尊と、その久遠元初・本因妙・一念三千の法を身読し悟られた、仏宝、末法本仏日蓮大聖人。その日蓮大聖人から薫陶を受け、かつ寝食を共にし、日蓮大聖人を手本とし、次代に、久遠元初・本因妙・一念三千の法を伝える精進をされた、僧宝、日興上人。この法仏人の三宝を立体化した安置が客殿式であります。日興上人御影が安置されるという事は、御影堂が日蓮大聖人在世、客殿が日蓮大聖人滅後を表わしていません。御堂は1日7日13日15日（衆会）の御報恩御講、御会式、御虫払い、各法難会、等々の根幹を成す法要をしますが、僧俗の仏事はしません。客殿は、僧俗願い出の仏事、師弟合い寄って行う丑寅勤行を行いま

す。御堂ではしません。

○紙幅掛け軸で、本尊、日蓮大聖人、日興上人の三副対の本尊を掛ける場合があります。通夜、葬儀の折にも、三副対の本尊を掛けて、行う場合があります。

○この様に考えると、地方各末寺は、滅後を表わす客殿式に通ずる意味する所だという事が分かります。身延日蓮系には、大石寺の様な、御影堂（在世）客殿（滅後）の立て分けは、全く無いと考えます。

以上の様に10項目に渡り、日蓮大聖人、日興上人、身延日蓮宗系の違いの内容を、現在分かる範囲で、対比し述べました。又今後引き続き、確かな資料、伝聞が得られれば加筆して、より正確なものにして行きたいと思えます。

「日順雑集」（宗要2-95p）

聖人御存生の間は、御堂無し、御滅後に聖人の御房を御堂に日興上人の御計として造玉ふ、御影を造らせ玉ふ事も日興上人の御建立なり。

と、あります。三位日順は日蓮大聖人の13回忌の永仁2年(1294)に生まれていますので、この内容は、重須談所で日興上人の弟子として学ぶ中で、日興上人からの薫陶の中で聴聞した事を書き留めたという事が容易に分かります。つまり、日蓮大聖人入滅直後、身延在住の時、既に日蓮大聖人の御影を造立安置されていたのであります。当然日興上人が願主となり造立したわけですから、身延離山の際に所持され、南条時光邸に身を寄せ、仮住まいし、大石ヶ原を開墾整備し、御堂が建立出来るようにする為に日興上人も日目上人も南条時光さんはじめ、富士方面の御信者さんも、身を粉にして野営の如くして努力されたはずであります。その姿を見守る様にして、身延から所持された日蓮大聖人の御御影様が仮堂に安置されていたはずであります。

西御坊御返事（歴代法主全集 1 卷101 p）

聖人の御影の御宝前に申上げまいらせ候了

西坊主御返事（同105 p）

御影の御見参に申上げまいらせて候

了性御房御返事（同121p）

聖人の御見参に入まいらせ候了

了性御房御返事（同122p）

法花聖人の御宝前に申上げまいらせ候了

これらの御消息から、堂の規模は分かりませんが、常に御本尊の前に日蓮大聖人の御影が安置されていた事が彷彿として分かります。又、日興上人が永仁6年（1298）2月15日重須へ移られた時も、重須に御影を建立してから、正式に移られているのであります。御本尊と御影一体の御宝前は、末法の本佛を日蓮大聖人と拝する日興門流の基軸であることが、明瞭に分かるのであります。

○大石寺では、日蓮大聖人と日興上人の御影だけで、日目上人以下の御影を造立することはしません。文献資料が無いので、推察するしかありませんが、日興上人が元弘3年（1333）に入滅され、9ヵ月後日目上人が入滅されます。日目上人は日興上人入滅後即座に日興上人の御影造立に着手され完成し、法・仏・僧の日蓮大聖人滅後を表す客殿式安置を定めたと推察します。そして、自身と自身以後の御影の造立を禁ずる戒めを弟子信徒に伝えたと推察するのであります。何故かといえ、身延日蓮系に於いては、その門流の中で、中興の祖とか功績の大きい上人の御影が造立され、御宝前に安置されているのであります。しかし、大石寺に於いては、全くその様な形態は皆無なのであります。（日目上人の絵像はありますが、御宝前に安置するものではありません。）御影は日蓮大聖人、日興上人に限る事が、まったく戒めの文献も無いにもかかわらず今日に至る迄当然の如く厳守されている事は、非常に重要な点と考えるのであります。

○大石寺御影堂安置 日蓮大聖人御影は、嘉慶2年（1388）10月13日仏師越前法橋快慶作
客殿安置日蓮大聖人御影万治3年（1660）10月吉祥仏工長谷川七左衛門作

客殿安置日興上人御影万治3年（1660）卯月（4月）仏生日（8日）

この御影以前の御影が、どこでどうなったのかという記録が無い為、一切分かりません。現在の御影堂安置の御影は、1388年造立したものであり、保田日郷が妙本寺に持ち去ったと大石寺が主張するものは、元中2年（1385）に造立した御影という事なのだろうか。そうすると、1385年以前の御影は、どうなっていたののだろうか、全く分からないのであります。日興上人の本尊と御影と一体の信仰観からすると、焼失する事があったとしても、直ぐに造立し、存在しない空白期間があったとは想像出来ない。その記録文書さえ、焼失したまま、覚え書きも無いというのは、大石寺自体が、日興門流の御影の重要さを軽薄に考えているの

ではないかと考えます。

○御影は、日蓮大聖人の久遠元初・本因妙・一念三千の法を、一切衆生平等成仏目指す信仰者自身が造立すべきであります。永年技術経験を積んで来た、仏師の方々は、確かに卓越した専門家で、自由自在に仏像を彫刻する事が出来ると思います。しかし、阿弥陀如来、大日如来、釈迦如来、薬師如来、観音菩薩、地藏菩薩等々職人として、商売として何でも造ります。しかし、久遠元初・本因妙・一念三千の法を信仰する信仰者ではありません。稚拙な技術であろうが、信仰者が時間を掛けて、日蓮大聖人の事、日興上人の事を想い描いて造立すべきだと考えます。私は、単純計算をすると一体に関わっていた時間が300時間程だと思っています。しかし、その内の200時間余りは、只々じ〜っと、向き合い見つめていた時間だったと感じます。人間の顔、身体、手足等々が、どうなっているのかが分からないで、考えないで生きて来た事を初めて知りました。向き合いながら、信仰者として喜びを感じました。仏師に依頼して購入し安置するだけでなく、日蓮大聖人、日興上人と向き合う事は、仏師には出来ない事なのであります。

令和3年7月吉辰 廣田頼道 拝